

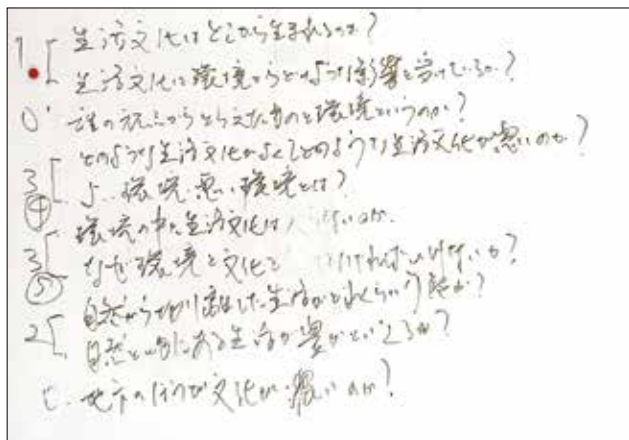
Ⅲ . 対話ワークショップの部

ここでは、1日目のポスターセッション（発表者同士でのポスター発表）の後に行った対話ワークショップと、2日目の対話ワークショップ（1日目のふりかえりが主な目的）で出た問いとファシリテーターの感想をご紹介します。対話は、2回とも哲学対話の形式で行われました。



12月15日

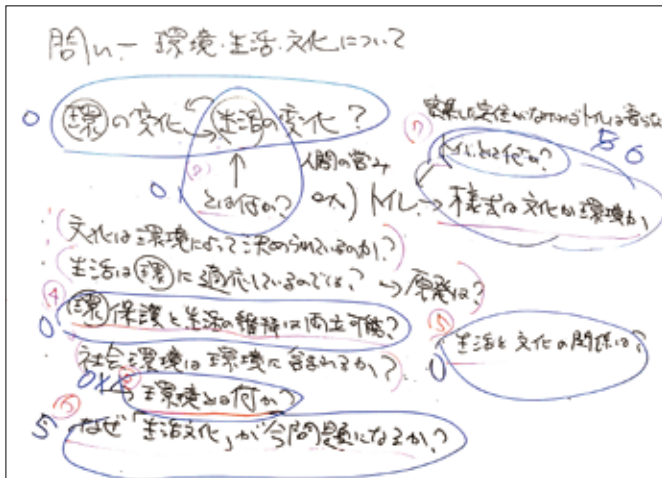
会場：東京大学駒場キャンパス 学際交流ホール



最初に対話のテーマとなる問いを出してもらったところ、環境と生活文化はどう関係しているか、いい生活文化と悪い生活文化は何か、自然と生活の豊かさはどう関わるかといった問いが出された。結局、環境と文化の関係について対話を行い、なぜこの二つが対立しているように語られるのか、人間にとっては文化も環境の一部ではないかといったことを巡り、様々な意見が出された。言葉の根底にある前提に立ち返り、シンポジウム全体のいい準備になった。

ファシリテーター 梶谷 真司（東京大学）





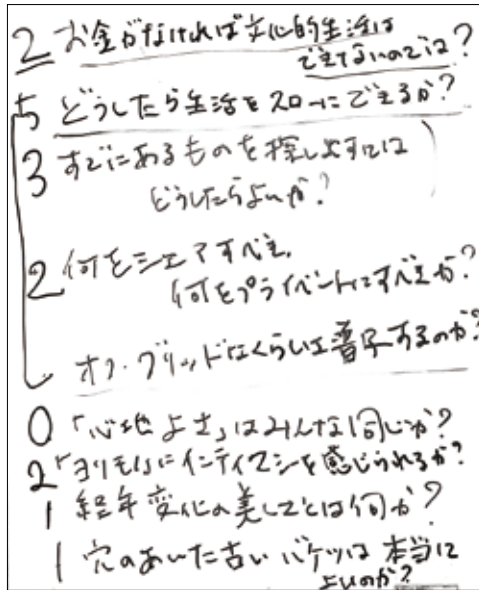
まず環境と生活文化に関わる問題として、環境保護と生活維持の両立可能性や、なぜ生活文化が今問題なのか、といった点について参加者が各々の見解を述べながら問いを深めた。哲学対話では「トイレとは何か?」という具体的な問いが選ばれ、個人の体験談からインドや中国、アフリカなどの世界のトイレ事情までが語られた。対話を通して、トイレが生活に必要な存在であるだけでなく、環境や文化と不可分であることが明らかになっていった。参加者が多様な考え方を吸収し、共通の問題を議論していくための人間関係を築くことができた。

ファシリテーター 八幡 さくら (東京大学)



12月16日

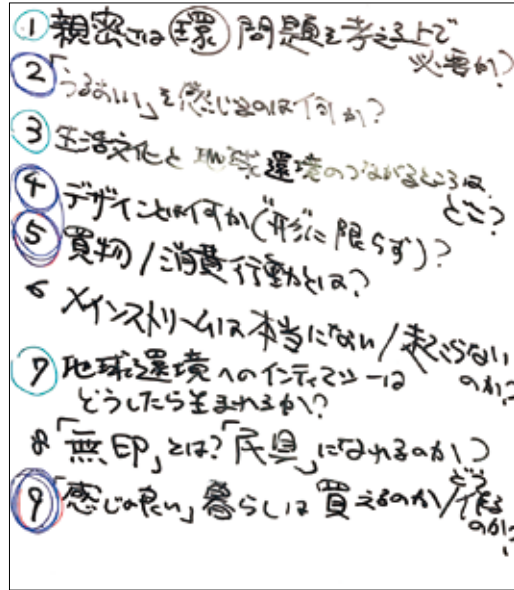
会場：東京大学本郷キャンパス ライブラリープラザ イベントスペース



「どうしたら生活をスローにできるか？」という積極的な方法の問いは、「オフ・グリッドな暮らしは普及するのか？」という疑念を含む問いとまとめられ、それに引き続き、「お金がなければ文化的生活はできないのでは？」という明確な疑いの問いが掲げられた。対話のなかで、肯定と否定のこの両面性は、一貫して維持されていたと感じる。言うなれば、肯定もしくは否定の一面性に取り込まれないための手立てとして、対話はおそらく機能している。これは確かに、肯定的な可能性である。

ファシリテーター 石川 学（東京大学）





初日の講演の話題を引き継ぎ、日常における広い意味での〈デザイン〉がテーマになった。日々の生活のなかで「うらおい」を感じるものは何か。「感じの良い」暮らしはそもそも物として作ったり買ったりできるものなのか。対話のトーンには若干の懐疑が含まれ、単にデザインのポジティブな可能性を語る言葉は少なかったと思う。都市型生活に限らず、現代の「生活文化」の基層は大規模産業技術のデザインに依拠せざるを得ない。そして、人間も物質である以上、環境のデザインによって動かされる。だからこそ、〈私たちは人間の生の内実をどこまで工学的、意図的に設計し得るとみなすべきか〉と、あらためて実践批判的に問い直してみることに今日の重要性がある、と感じた。

ファシリテーター 大池 惣太郎 (東京大学)

